

追悼 山口巖先生

「能格的過去」から「活格的過去」へ

—デスニツカヤ論文によせて—

石田修一

山口巖先生の著書「類型学序説—ロシア・ソヴェト言語研究の貢献」（1995. 10. 31 京都大学学術出版会）の引用文献欄を見ると、最初にデスニツカヤ著「比較言語学と諸言語の歴史」¹が挙がっている。そこであらためて同書に目を通してみると、その人名索引に挙がる多数の言語学者等の中でとりわけ群を抜いて引用頻度が高いのはクリモフ（1928-1997）とデスニツカヤ（1912-1992）である。その後にはガムクレリゼ、ヴァチエスラフ・イヴァノフ、メイエ、グフマン、バンヴェニスト、メッシュャニーノフ…のように続く。この内日本の言語学関係諸文献で一般に知られているのは、メイエとバンヴェニストとメッシュャニーノフくらいであろうか？²恐らくこの山口著が現れる以前には、上に列挙したメッシュャニーノフ以外のロシア・ソヴィエトの言語学者名について、ましてデスニツカヤについては、一部の専門家³を除いて我が国のほとんどの言語学関係者には無縁、無名の人名であるかと思われる。尤も、わが国の言語関係者なら誰でも知っているディクソンもコムリーもデスニツカヤについては論外らしい⁴。参考文献に使った気配は見られない。一方、今やその訾咳に接することもなくなってしまったが、本稿筆者も含めて類型研参加者には、山口先生が類型学研究会や雑談の場でもデスニツカヤについて話題にされることが多かったという印象がある。実は、彼女はクリモフと共に今日の内容類型学の成立に最も大きく寄与した言語学者と言っても過言ではなかろう。本稿では、1930-40年代のメッシュャニーノフ期に多数派を形成していた主格言語の「能格的過去」説に対して孤軍奮闘して同説に抗ったデスニツカヤの語るソヴィエト言語学史を振り返って観たいと思う。

クリモフは、「活格構造言語の類型学」⁵第1章において、活格構造言語の析出に至る経

¹ Десницкая, А.В. Сравнительное языкознание и история языков（「比較言語学と諸言語の歴史」）. JL, 1984.

² 例えば、広く普及していると思われる「現代言語学辞典」（成美堂 1988）

³ 例えば、千種真一「印欧語曲用の類型的再編について」『文化』（東北文学会）49：1-2, 1985；idem「印欧語中動態の機能と形態」『東北文学部研究年報』39, 1989；idem. 「印欧語における文構造と動格性」*ibid.* 41, 1991 等には全て、デスニツカヤ「比較言語学と諸言語の歴史」1984所収の諸論文が挙がっている。

⁴ 山口先生の英文論文“Concerning Diathesis and Related Categories”には、デスニツカヤ論文を引用するに当たって、彼女について“not well-known in Japan but one of the outstanding figures in I.E. linguistics”と説明されている—山口巖教授停年記念論文集「ことばの構造とことばの論理」, 古代ロシア研究会, 1998, p. 510.

⁵ これが原題である。同著は拙訳書では、次のように改題された—G.A.クリモフ著「新しい言語類型学—

緯について、① 印欧語の最古層の研究、② 能格構造言語研究、③ 現有活格言語の記述研究という三つの研究系統それぞれの進歩に立つてこそ初めて活格類型の定式化が成るはずであったが、これら三系統は長期に亘ってほとんど接点を見出し得なかった、と述べる。すなわち、印欧語の古層研究は伝統的な比較言語学の枠の外へ出ることは容易ではない状況下にあったし、能格理論は断片的な諸事実の集合と主格（対格）言語のプリズム越しに記述する「エキゾティック」言語観の中で正確な能格言語像を結ばず、さらに北米・南米インディアン語の現有活格諸言語とは言えば、これもまた欧米の主格言語のプリズム越しに記述されたものばかりという状況であった。その上で、クリモフは、「活格構造理論の成立に最も寄与したのは、印欧語学と能格理論であったといっても過言ではなかろう」と述懐している。この印欧語学と能格理論を結び付けた中心にいたのが印欧学者デスニツカヤとカフカース学者クリモフである。

デスニツカヤ著「比較言語学と諸言語の歴史」（1984）⁶の巻頭論文として書かれた50ppほどの論文がその言語学史に相当する。本稿では、同論文について本稿筆者のコメントを試みるとともに、最後に資料として同論文の拙訳（全訳）を付することにする⁷。

ところで、この「比較言語学と諸言語の歴史」の主要部分、核心部分は、実は、元々タイプ打ち674ppに及ぶ大作の博士論文「印欧諸語における直接補語範疇の発達」（1946）であって、同論文自体は未公開のままであった。1984年になってようやくその主要部分をまとめて「比較言語学と諸言語の歴史」に収めることができたときには、博士論文（1946）からすでに40年弱が経過し彼女はすでに古希を超えていたのである。

同著の構成は、I. 印欧諸語の文法構造の発達の問題によせて、II. 印欧諸語の歴史から、III. Balcanica、の三部構成になっているが、これはIからIIIへ進むに従って、彼女の関心が、印欧諸語の文法構造の起源問題全般から印欧語古層に後続する各個別の印欧諸語の歴史へとシフトして行ったことを示している。同博士論文の主要部分は第I部であって、その第I部冒頭に同著の巻頭論文として、「1930-40年代のソヴィエトの言語学者たちの諸研究における文類型の問題と印欧諸語の主格構造の起源の問題（ソヴィエト言語学史からの一章）」が置かれるが、これが同著の編集に当って新たに付け加えられた論文である。これはマール亡き後のメッシュャニーノフ期以後30-40年代に活動した当事者（デスニツカヤ）自身が記録したソヴィエト言語学史である。主格言語に先行した類型としての「能格的過

活格構造言語とは何か」,三省堂,1999-。改題は三省堂からの提案であったと記憶している。改題のきっかけにメッシュャニーノフ等の「新言語学」(“Novoe učenie o jazyke”)があったか否かは不明である。

⁶ 原題については、註1参照。

⁷ 「類型学研究」5号誌の柳沢民雄氏の論文「ロシア・ソヴィエト言語類型論とカフカース諸語」の註に、30-40年代の言語学史についてのデスニツカヤのこの巻頭論文からのかなり詳しい抜粋・引用を読むことができる。本稿（添付資料）とあわせて参照されたい。

去」説が如何にしてまた何故「活格的過去」説へ収斂して行くのかという過程を郷愁も交えて語られる点で興味深い。カツネリソンやメッシュャニーノフの人となりも浮んでくる気配がある。第I部ではこの巻頭論文に続いて、6テーマに分割された次の諸節（彼女の博士論文の主要部分抜粋）が続いている：「名詞類別と印欧語曲用の問題」－「印欧諸語における対格の起源について」－「印欧諸語における対格の文法範疇の発達の歴史によせて（ホメロスの『イーリアス』の言語における対格の機能）」－「動詞の他動性の範疇」－「古代ゲルマン語の与格補語」－「活格的文類型から主格的文類型の発達の問題によせて（古代ゲルマン語の与格補語についての論文への補遺）」。

さて、この巻頭論文以下では彼女に従って序論（Vvedenie [introduction]）と呼ぶ一を書き加えた動機を語る彼女の言葉には万感交際の思いが感じられる：「このモノグラフが当時未公開のままになっていたこと以外にさらに（この序論執筆に）私を掻き立てたのは、メッシュャニーノフの周りに結集した若き言語学徒らの間で歴史的な類型学とりわけ印欧諸語の主格構造の起源に関する諸問題や主格構造に先行して能格的文段階がありやなしやといった諸問題に関して熱い論争に沸いた遠き昔日の思索と探索の成り行きについて読書子に伝えておきたい」「二つの動機」がある、として次のように指摘している：「1. 現在では、文法構造の史的類型学の諸問題が再び言語諸研究のアクチュアルな課題となりつつある。それ故、1930-40年代のソヴィエトの言語学者が展開した類型学構想は、すでに言語学史の特別な章として注視対象であり研究対象となっていること、2. 当該諸問題とりわけ主格構造の起源問題についての研究の現段階で、印欧諸語における直接補語範疇の起源また同じく動詞の他動性 / 非他動性範疇の起源の問題に取り組んだ私の初期の諸研究で当時展開した構想が賛同・支持されていることについては喜びを禁じ得ない。この構想は最近認められた活格構造理論に完全に収まるのである」。そこで、この「二つの動機」から書いたこの「序論」の課題は、「a) 公刊対象となった拙論諸章をその執筆当時の昔日の歴史的な脈絡と提示し、それによって今日『内容類型学』と称されるに至った学的思潮の生成と発展の途上で起きた学術的諸論争の舞台環境をせめてその一部なりとも再現して見せることであり；b) 1930-40年代の類型学諸研究と今日の諸研究を結びつけることである」。

ところで、デスニツカヤは、この「序論」について、クリモフが書いた学史『ソ連邦における類型学研究（20-40年代）』（モスクワ、1981）は⁸、綿密かつ完全な客観性をもった

⁸ 2000-2001年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1)研究成果報告書「ロシア・ソヴィエト言語類型論の研究」（研究代表者 柳沢民雄）2002年2月28日発行（名古屋大学言語文化ロシア語研究室）に資料として付されたクリモフ著（拙訳）「ソ連邦における類型学研究—20-40年代」（同報告書p.241-308）がある。なお、この拙訳の底本「Типологические исследования в СССР(20-40 годы)», Наука, Москва, 1981）は2017年にЛЕНАНД（URSS）出版社から再版されている。

記述であるが、自分の語りは論争の現場にいた当事者の実況の再現だから、その語りに当事者としての感情やパトスがこもっていても読者諸氏は驚き召さるな、と釈明している：「クリモフは、一定の時間的距離から自己の研究対象を観察する学史家としてこのテーマにアプローチしている。…容易に理解できることであるが、この歴史に対する当事者たちの眼差しは、学者達の生きた思想の躍動を単に出版物に描出する目的に限って研究するにすぎない歴史家の眼差しほど叙事風に平静であったり、また広く網羅的ではいられない。当事者の眼差しは、例え諸事実の説明上ではなくとも、ともかくその諸事実を選び取る上で、ある程度主観的に着色されることは避けられないだろう。裏返して言えば、科学的伝統を創造した当事者たちは、万事が実際どうであったかを知っており、時系列順や、自分の時代にとっての現実的重要性を考えたり、その現実的重要性を構成する諸要素を感情を込めて着色してまで、この伝統がどのように形作られて来たか、を示す生の情景を（勿論、そう望むならば）再現して見せることができるのである。…私の語りの特徴は…専ら印欧諸語の主格構造の起源問題に注意を絞りつつ、私自身の諸研究も進んで来た路線での具体的発展方向を構築する上で、すなわち文構造の史的類型学の分野において、特に重要な役割を演じてきた幾人かの論者たちの研究路線を強調的に取り上げる点に現れている。…30-40年代の類型学構想の歴史記述の私の基本方針とクリモフが基礎とした修史の方針とは本質的に異なることである。…私の概観で課題としたのは、印欧諸語の主格構造の起源問題をめぐるかつての論争の内容的な文脈をできる限り再現することであり、特に、かつて私が論駁対象とした主張や、私自身が反論のために練り上げた『反能格論者』としての自説の主張を浮き彫りにすることであった」、と。クリモフの学史は後世の史家として冷静で透徹した客観的な記述であるが、デスニツカヤの学史は30-40年代の論争の場にいた当事者の生の記述だというのである。なお、クリモフの学史はソヴィエト以前・以後マール期から50年論争以前までの「網羅的な」学史（20-40年代）であるのに対して、デスニツカヤの学史はメッシュャニーノフ期（1934年～）以後の80年代前半頃までの学史であり、当事者たる彼女自身が評定する学史である。

彼女の「序論」の主題は、前主格言語研究における「能格的過去説」から「活格的過去説」に至るまでの学史である。30-40年代にイヤム（言語と思考研究所）においてメッシュャニーノフの周りに集まった研究者集団の間で交された段階性論や印欧語「能格的過去」説をめぐる激論の肉声ごと提示する如く当時の論点を浮き彫りにする—それがデスニツカヤの序論の記述の趣旨であろう。そこでこの論戦の主役として特に取り上げられるのは、30-40年代の能格論の研究での典型としてカフカース諸語のボカリョフ、ゲルマニスト集団の中でのカツネリソンとグフマンとデスニツカヤ、カフカース諸語、古アジア諸語、北

米インディアン諸語とイヤム研究所の主宰者としてのメッシュャニーノフそして、クリモフとデスニツカヤ自身の研究である。イヤム研究所内のゲルマニスト・グループの中でカツネリソンもグフマンも熱心な能格性論者であったが、デスニツカヤは、カツネリソンが1941年の初め彼女とボカリョフに、「人なつこく議論を吹っ掛ける調子で『能格論者から反能格論者へ』」と記した自著論文の抜き刷りを謹呈した、と書いているように（序論の註49）、研究所内ではカツネリソンやグフマン等を中心とした「能格性論者」が概ね多数派を占める中で、デスニツカヤが独り孤軍奮闘して、ホメーロスの「イーリアス」の他動性と対格の研究で示した印欧語古層が結局クリモフの活格言語像に収まることが明らかになる、すなわち印欧語活格説が認められるに至った経過が明らかになっていくのである。

この小論では、ボカリョフ、カツネリソン、メッシュャニーノフ、そしてクリモフ、デスニツカヤの研究だけを取り上げる。また、これが「類型学研究」5号の拙論「人類史における活格言語、能格言語—内容類型学の視点から」への補説ともなれば幸いである。

あまりにも夭折であったアナトーリー・ボカリョフ（1910-41）であるが、今日でも衰えない価値をもつ大作「アヴァール語統語論」（1949）を遺している⁹。当然、デスニツカヤにとってアヴァール語やダゲスタン諸語の師でもあった対ボカリョフ評は極めて高く温かい：「驚くべき緻密さと深い言語学的分析」をもって、アヴァール語資料に基づいて能格的文構造をもつ言語の統語組織を記述したと評される。能格性研究面でのデスニツカヤの対ボカリョフ評のポイントは、第一には、他動詞述語文、自動詞述語文等の構文諸タイプが動詞述語の方向付け（orientation）に規定される、別言すれば、構文種を決定する核心にあるのは動詞であるという観察（動詞の語彙化原理こそが構文法を決定するという観察）、第二に、斜格機能の一般能格と、能格構文の主体格としての特別能格（クリモフの言う「専用能格」）の区別に連係する能格構文認識、第三に、他動詞の自動詞的用法と自動詞の他動詞的用法の存在、すなわち他動性と非他動性の意義が同一動詞に重なる事実（動詞の意義の二義性）の背後に他動詞・自動詞対立が欠落した歴史的な古層が潜んでいるという認識、第四に、構文タイプと「持続態」（длительный залог）の意義の連関性—持続的行為と自動詞との共起性—についての観察¹⁰。デスニツカヤの序論には次のような行

⁹ A.ボカリョフは独ソ戦（1941-45年）—レニングラード包囲戦—で戦死した。開戦直前（1941）に脱稿していたが、上梓できぬまま義勇兵として戦場へ向かった。この原稿は同じ研究者の兄E.ボカリョフに託され、A.ボカリョフの死後出版された。当然、同著の意義について前書きを書いたメッシュャニーノフからの評価も高い。

¹⁰ 柳沢氏は「類型学研究」5号（p.6-7）の巻頭論文「ロシア・ソヴィエト言語類型論の貢献」で、ボカリョフのいう「持続相」動詞の自動詞化について、ディクソンの言う逆受身と同じ意味内容だと説明している（cf.「ディクソン著『能格性』[研究社2018]「訳者あとがき」での同趣旨のコメントも）。本稿筆者も同誌の拙論「人類史における活格言語、能格言語」（p.145）で、「他動詞主格構文」について、同構文と持続性との関係につて語るM.E.アレクセーエフの解説とともに、ボカリョフ「アヴァール語統語論」

りがある：「私は当時支配的であった、印欧諸語の『能格的過去』説の熱狂に捉われたことはなく、古代印欧諸語における主体・客体関係の表現システム（組織体系）の起源問題に関する自説の完成に努めていた。それを促した要因としては、恐らく、私の古代諸言語の学習は勿論だが、独特の変異型の能格的文構造を見せるグルジア語との出会い（3年間ドンドゥア[1891-1951]の指導を受けて古代グルジア語を勉強したこと）や、また同じくボカリョフのような当該問題の権威たる専門家から授かった、アヴァール語やその他のダゲスタン諸語における能格構造の特徴についての具体的で多面的な情報知識がある」というデスニツカヤの弁からすれば、このことは印欧語古層の「反能格性」説を側面から支えると同時に、これによって印欧語学とカフカース語学との直接的な接点の場が築かれたことになったのである。したがって、内容類型学の集大成に大きく貢献したこともボカリョフの活動の特徴に挙げることができよう。また、「ボカリョフが厳密な統語的概念と用語によって行なったアヴァール語能格構造の記述に比べて、彼の同時代の多くの記述は同様の構造に関する後続期のいくつかの記述も同じく、皮相で不完全である点は指摘しておいてよいかもしれない」という彼女の指摘は印象深い¹¹。

30-40年代のイヤム研究者集団が、主格構造には能格構造が先行したというマール以来の漠然とした認識を真に科学として証明する活動に集中して行ったこと自体に何ら批判されるべき点はない。カツネリソン（1907-1985）は、印欧語の能格的過去に関する仮説を認めていたユレンバック、シューハルト、マール、メッシュャニーノフ等先達の諸研究の再検討から始めて、論文「主格文の起源によせて」（1936）において、印欧語の古層における、能格構造から主格構造への変換の証明に取り組んだのである。同論文の第V章「原始的意識における客観的なものと主観的なもの—意識史の分野への補説」において、能格

（1949）の「持続性...のアスペクトはこの動詞の基幹的な『態』（zalog[voice]）の意義に発するもの」を紹介した。実は、クリモフ「能格性総論概説」（Očerki obščej teorii ergativnosti [Outline of a general theory of ergativity], 1973 [2009], p.147 [改定拙訳私家版 2020, p.108]）も、K.Bouda, Subject- und Objectcasus beim awarischen Verbum, “Caucasia”, 1931, fasc.9, p.42 とボカリョフ論文「アヴァール語他動詞の『受動的』性格について」を参考にしながら、持続性と自動詞化に関して次のように記述している：「ボウダは、事実上すでに1931年、アヴァール語における他動詞～自動詞原理による動詞語のさらに進んだ安定化傾向に気づいていたのであるが、その時彼は、他動的行為の反復性、多回性ないしは持続性を表す動詞は全て、ここでは主語の名詞を能格形ではなく『主格』形に措くことを条件づける、と確認したのである。尤も、ボカリョフの態（相 zalog [voice]）という用語法の問題は脇へ置くとしても、また30-40年代にすでに析出されていた持続性を表す構文が関係類型学がいう「逆受身」構文に相当することを変形規則によって説明できるとしても、何故持続性の意味が自動詞化に繋がるのかという深層的な理由の説得的な説明がない限り問題は解決されないうままであろうと思われる。

¹¹ 例えば、デスニツカヤの上述の博士論文と同じ年（1946年）に、活格構造の形態的包含事象—遠心相と求心相（ヴァージョン）あるいはまた有機的所有（非分離所有）と非有機的所有（分離所有）—の解明において「抜群の役割を果たした」N.F. ヤーコヴレフ（1892-1974）やA.P. リフチン（1900-1945）等々について「特に指摘しておかなければならない」—クリモフ著「ソ連邦における類型学研究」（名大科研報告 p.281）—とする記述もある。

的文構造の始原的な意味原理＝能格構文の「觀念形態 (ideology) の内容」として提示された構想はマナやオレンダ (デスニツカヤ論文参照) のような思弁にすぎず、結局ユレンバック等の構想の焼き直しの感があるから、デスニツカヤは「能格構造の他動詞文の構造化に宗教的因子を持ち込むことを否定した」はずのカツネリソンの解説は依然として不分明だと評している。能格構造にとって最も特徴的な、他動詞述語下で斜格主体 (行為主体格の機能は能格が内包する斜格機能の一にすぎない) をもつ構文の決定的要因になるものは何かという問題に対して、それが原始的意識に由来するという思弁が未完に終ることは、今日から見れば当然のことである。ところが当時は、能格の正に間接客体的な、また特に具格的機能こそ、原始人の思考の神話的性格とやりに能格構文の内的動因子を探索するという根拠の一つになったのである。「一つの類型的組織 (system) に二つの値が属すること…これはつい最近になってようやく認知されたことである」¹²。能格についても、これが主体機能と客体機能 (具格機能と間接客体機能) を原理的に兼務していることを最初に強調したのはメッシュャニーノフであり¹³、これは30-40年代のソヴィエトの言語学者間の共通認識であった。他動詞—自動詞の対立が公理である関係類型学にとっては、恐らく能格が主体格機能とそれ以外の斜格機能を融合している内的動因子は何かなどと考える問題意識はなさそうである¹⁴。クリモフが「今なお能格の主たる機能が主体機能だけだとするテーゼに従っている」能格論がはびこっている点について批判していることは先の拙論で紹介した通りである¹⁵。

一方で、カツネリソンは同じ論文「主格文の起源によせて」の同じ第V章「補説」で、ユレンバックの「受動格」すなわち絶対格の機能的定義が不十分であることを指摘していることは指摘しておくべきであろう：ユレンバックは「この格の統一した定義を与えていない。定義は、明らかに二つの部分が継ぎ合わされており、その内の一つは、自動詞 (resp. 非能動動詞) の主体の役割での受動格 (『それ自体自立的に』、『一定の状態にある物ないしは人の格』) を想定したものであり、もう一つは、他動詞の下での、客体の役割での受動格 (『…より強いある人ないしはある物の影響下で一定の状態になる』人ないしは物の格) を想定したものである。しかしながら、正に二つの機能の発生的一体性を解明することこそが課題であり、そのためには、『自立的に一定の状態にある』事物に『受動的なもの』の何が含まれているかという間に明確な答えを与える必要がある」と¹⁶。

¹² クリモフ「内容類型学の原理」、三省堂、2016、p. 129

¹³ Мещанинов И.И. Новое учение о языке. ОГИЗ, Государственное социально-экономическое издательство, Ленинградское отделение, 1936, p. 190-191

¹⁴ Cf. R.V.W.ディクソン「能格性」、研究社、2018、p.71

¹⁵ G.A.クリモフ「内容類型学の原理」、三省堂、2016、p.130 ; cf. 「類型学研究」5号、p.127-130

¹⁶ Кацнельсон С.Д. К генезису номинативного предложения (Историко-грамматическое исследование),

今日でもなお、能格言語は S/P ピヴォットだと説明しても、何故 S=P かという問題はやはり関係類型学では論外の問題であろうか？

カツネリソンは印欧語の「前能格構造」を探る中で、二種類の能格構文—古体的 (archaic) と残滓的—を区別すべきだという考えに到達していた。「主格文の起源によせて」第 VI 章「ゲルマン諸語における能格的過去の痕跡」からのデスニツカヤの引用を少し広げて紹介しておく、「何れの構文 (конструкция) も文の構造 (строй предложения) と混同してはならない。世界の大多数の諸言語における文の構造は、主格構造である。能格構造から主格構造への決定的転換点は、分詞、形容詞等の形成である。北カフカースのヤペテ諸語はすでに受動分詞形をもつから、同諸語は境界線上に並び立つのであり、能格構文はそこでは残滓である。印欧諸語は、いくつかの他の諸語も同じく、もっと決定的に前主格的統語法と決別してしまった。しかし、ここでも、ご覧の通り、痕跡は十分にある。その痕跡は程度の差こそあれ、完全にこれら諸語の能格的過去について証明している」¹⁷。デスニツカヤは、これについて、「この観点からすると、北部カフカース諸言語における能格構文も、カツネリソンの考えによる印欧諸語 (やその他諸言語) に現れる能格構造の諸特徴も、残滓的なのである」と解説を加えている。つまり彼は、北部カフカース諸語と印欧諸語は同じ主格構造の中に存在する前主格構造の残滓性の程度の差として認識していたということになる。「カツネリソンは、著書『主格文の起源によせて』の出版後 10 年を経て新たに能格性問題に取り組んでからは、カフカースのヤペテ諸語やバスク語等に現れている能格構文を、その先駆けである原始諸言語の能格文と原理的に区別すべきことを再三強調したのであった」(デスニツカヤ)。そして、この「残滓的」能格性を基にして (特にオーストラリアのアランタ語の資料に基づいて) いわゆる「現実的」能格性 (世界の多数諸言語に残る能格性) と「古体的」能格性を再建することになる: 「現在では、実際的に古体的 (アーカイック) な能格的文構造と残滓的能格構文間の違いをもっと直接的に確定できる可能性がある。この可能性が出てきたのは、古体的 (アーカイックな) 能格文が生きた規範であるオーストラリアのアランタ族の言語の学術的精査のおかげである」¹⁸。20 年後 (1967 年) の「能格構文の起源によせて」では、次のように述べる: 「アランタ語の動詞は、他動性と自動性の点で融合的である、すなわちもっと精密に言えば、こうした融合性 (syncretism) のあからさまな痕跡を顕してい

Петербургское лингвистическое общество, Санкт-Петербург, 2010, p.98-99); cf. クリモフ (拙訳) 「ソ連邦における類型学研究—20-40 年代」(名大科研報告[代表柳沢民雄], 2002, p.277)

¹⁷ Кацнельсон С.Д. К генезису номинативного предложения, 2010, p.112

¹⁸ Кацнельсон С.Д. Эргативная конструкция и эргативное предложение. – Изв. ОЛЯ АН СССР, 1947, № 1, p.44. (デスニツカヤの序論からの引用);

る」；「二つの客体格—能動格 active case と非能動格 inactive c.—をもつ能格構文は、アランタ語を一つの客体格だけの能格構文をもつ他の多くの諸語と区別させる」¹⁹。その能動格とは、ディクソンが取り上げた問題の -na 指標である²⁰。クリモフは、「活格構造を能格構造から切り離す方向へ向けて最も重要な一歩を踏み出したのはカツネリソンの研究であったが、…問題の核心は、論者がここで他動詞と非他動的な運動の動詞が一つの語彙類として統合されている限りにおいて、この状態に対して、能格構造が特徴とする原理とは異なる動詞語の語彙化原理があることを立証したことにある」²¹、と評している。イヤム集団の中で最も熱狂的な能格性論者の一人であったカツネリソンは、「自分の諸研究の当然の論理として、最初に表明したテーゼすなわち印欧諸語における主格構造の出現には能格構造一文の普遍的な発達段階としての—が先行していたはずだとする見解からは、はるか遠くへ逸れてしまったのである」（デスニツカヤ）。

ところで、デスニツカヤは次のように指摘している：「能格性の諸問題の研究史においてカツネリソンの著書『主格文の起源によせて』は、何よりも先ずその理論面において、また文法的諸範疇の歴史的意味の面からのアプローチの点で、重要である。同著は多年を経て後カツネリソン自身が『内容的』類型学と呼んだ、文法研究路線の発展過程における

¹⁹ Кацнельсон С.Д. К происхождению эргативного предложения (Эргативная конструкция предложения в языках разных типов, Из-во «Наука», 1967, p.38, 41. 所収—1964/12 連科学アカデミー言語学研究所レニングラード支部で行なわれた拡大教授会での報告論文集)

²⁰ ディクソンの解釈は内容類型学から観ると、実に奇異でこじつけた解釈に映る。この問題は、拙論「人類史における活格言語、能格言語」—「類型学研究」5号, p.136-138—においても取り上げたが、その問題点について繰り返しておく。最大の問題点は大原則—統語が形態を規定する—に反して、「統語レベルと形態レベルの諸要素の相関関係を逆に解釈する」(クリモフ)ことである。統語と形態で「分裂」が現れる場合、主格性は統語階層に、能格性は形態階層に現れる。尤も形態は語彙と統語の転置 (transposition) であるという原理は、内容類型学の枠外で確立した公理である。ところが、ディクソンは、ディルバル語の統語構造は能格的な性格を有することを認めながら、形態では主格性への逸脱を見出すのである。すなわち、名詞形は能格型の形態分布を示すのに対して、1,2 人称の人称代名詞の曲用は主格性の曲用を示すというのである：名詞曲用では A,S は有徴 -ngu (能格)、O は無徴 -Ø (絶対格) という能格型に対して、1,2 人称代名詞では A,S は -Ø、O は -na のように主格型の形態法を示すと説明する。すなわち、人稱代名詞組織は主格組織を、名詞組織は能格組織を有する分裂 (分離) を示すと解釈している。しかし、正にこのカツネリソンの研究に示されたように、能格言語中には活格性の名残りを留めるものがあり、オーストラリアの能格言語には、活性・不活性の区別用に「二つの客体格」(-Ø も -na) が残滓していることは、ディクソンの視野の外にある。しかも、古層では 1,2 人称の人稱代名詞はしばしば格変化を欠く性質があることも彼の想定外のことらしい。(次を参照) → R.M.W.ディクソン「能格性」, 研究社, 2018, p.161 ; この問題に対するクリモフのディクソン批判は、以下の諸文献を参照 — G.A.クリモフ「内容類型学の原理」, p.47, 161-164 ; Климов Г.А. Очерк общей теории эргативности, Наука, 1973 (ЛИБРОКОМ, 2009), p.114-115 (クリモフ「能格性総論概説」[2020 拙訳改定私家版 第3章 p.80-81] : 「オーストラリアのアランタ語においては -Ø 指標と -na 指標という二つの絶対格の形があり、その内後者は直接補語の名詞が活性類に属することを指示するのである」。クリモフの全体としての対ディクソン評については、G.A.クリモフ「内容類型学の原理」, 三省堂, 2016, p.87-89 を参照。

²¹ クリモフ「新しい言語類型学—活格構造言語とは何か」, 三省堂, 1999, p.34.

確かな一歩であったことは認めてよいことである」。すなわち、「内容類型学」はカツネリソンの命名である²²。

比較言語学の方法と「段階的言語史」、別言すれば史的類型学のアプローチとの合体の学的有効性については、ジルムンスキー (В.М.Жирмунский 1891-1971) も、「段階的言語史への道は、比較文法の中を貫いている」；「起源的な比較文法は、類型学的な比較文法に基礎を置かなければならない」と述べるように、比較言語学と類型学の協同は、ソヴィエト・ゲルマニストの最も重要な関心事であった。その点で、カツネリソンを含む「30-40年代に史的・類型学的研究の独特の潮流を見せた」イヤム集団のゲルマニスト・グループについてのデスニツカヤの指摘に注目しておきたい：「この潮流の特徴は、印欧語比較言語学の資料と方法を用いて、段階的・類型学的構想と印欧語比較言語学の分野での具体的研究とを結合したことであった。こうした結合に内的矛盾は存在しなかった。当時祖語に関するテーゼは断固として否定されていたけれども、印欧諸語（とりわけ古代）の統語的組織体系において主体・客体関係の表現を担う文法範疇の起源と発達の諸問題は、印欧諸語の歴史的共通性を認める範囲内で提起され解決されていたからである」。一方、「30年代に印欧語主格文構造の歴史的原点に関する問題の研究に取り組んだソヴィエト・ゲルマニストたちの関心は、比較言語学の伝統から離れられなかったことである。しかしながら、彼らの諸著作で本質的に新しかったのは、文法的諸事象の意味面への高い関心の増大と統語的アプローチであり、このアプローチによって、研究対象とする諸形式（例えば格の諸形）を、パラダイム内でのそれら諸形式間の相関関係（クリウォーヴィチ構想におけるような）においてだけでなく、それら諸形式の機能体系（システム）の中で観ることができるようになったことである」（以上、本稿に付した拙訳デスニツカヤ「序論」から引用一「資料」を参照）。この点で今なお関係類型学の関心と対照的である。

さて、デスニツカヤの記述からは、メッシュャニーノフ (1883-1967) について概ね三つの時期を読み取ることができると思われる。すなわちマール亡き後の1934年の「新言語学」についての綱領的報告に始まる時期、次いで40年代中頃から50年論争で史的類型

²² Кацнельсон С.Д. Типология языка и речевое мышление. Л., 1972 (2009), p.11—同著の巻頭論文「問題提起に向けて」«К постановке вопроса»の記述：「諸言語は内容面に類似性特徴も差異性特徴も顕すという理由からだけでも、内容面を類型学研究の軌道にのせることは不可欠である。類型学を言語構造の一様性と多様性、一致と不一致、不変性と可変性に関する学であると理解するならば、言語形式の内容もまた類型学の『学知』«ведение»の下にある。言語全てに共通のものとそこに発現する主要な差異性の基底を解明することを目標に置いていた17-18世紀の普遍文法からして、差異は諸言語の内容面にもあることを知っていた。それ以来、当該研究において真っ先に我々が関心を寄せる内容類型学 (содержательная [конгенсивная] типология) の問題は、多数世代の言語学者たちによって、またある程度は哲学者、論理学者、心理学者らによって精査検討されてきた」。

学研究が中断されるまでの時期、最後に 60 年代中頃史的類型学研究の復活の時期である。

1934 年の綱領的報告「新言語学に照らして見た諸言語の分類問題」では、「言語内諸事象」の研究課題を定式化し、諸言語の知識の深化、言語諸事実に足場を据えることの重要性を強調したが、理論面の課題としては「文法的諸現象の史的類型学の諸問題」が第一義的であった。その上に立って段階的類型論を基調テーマとして、初めて能格構文を段階的現象とする解釈を提起したのである。そしてこの綱領草案を実行したのが著書「新言語学」（1936）であった。これは 1934-35 年にレニングラード大学で講ぜられた連続講義の基になったもので、北と南のカフカース諸語、古アジア諸語、北米ネズ・パース語、ウラルトゥ語の主体・客体関係の歴史的類型論の研究が課題であった。ここで思考タイプ毎に挙げられた四類型（四段階）は、1) 能動的・神話型（能動的・受動的段階）、2) 受動型（受動的・能動化段階）、3) 能格型（形式的受動段階）、4) 能動型あるいは能動的・論理型（形式的能動段階）、すなわち現代の用語では主格型（欧米やわが国では対格型）である。1) は、能格諸語において斜格が主体機能を担う exotic 言語の内的動因子を求めるレヴィ・ブリュールやユレンベック等以来から想定された「魔法的」思考構想のレガシーにすぎないとか荒唐無稽だと言って、この区分の事実確認だけで素通りするのが普通であるが、ここでは若干立ち止っておく。恐らく関係類型学も含めて形式類型学一般ではこの種の問題意識の発想そのものが起るはずもないと思われるが、どうだろうか。このことに関連して、上記のソヴィエト・ゲルマニストの特徴についての指摘とともに、デスニツカヤの発言を引用しておく：「印欧諸語の『能格的過去』について専門研究が始まった 1930-40 年代の時期を振り返ってみてもう一度強調しておきたいと思うことは、これは文法範疇の史的類型学の諸問題の研究における『意味的』時代であった、という点である。主格的文構造の生成と発展の諸問題を扱った当時の諸研究では、…できる限り古代諸言語テキストに取り組んで、研究対象とした文法的諸事象の機能面の分析に論証の重点を置いたことが特徴的である。…研究者達は、名詞語幹や動詞語幹の諸タイプの相違と類似とか、パラダイム構成要素中の格指標の形式的相関関係といった形態的諸事実を、意味的に解釈し、それ等諸事実の機能・文法的な原理を定義し、そこで初めてあれやこれやの仮説を立てようと努めたのである。…二次的で偶然的かもしれない音声面の外見的一致を含む個々の格形式指標の比較と同定化によってのみ当該問題を純形態論的視点で解決しようとしたそれ以前や同時代や後続の試行と比べてみると、この全ての点で印欧諸語の『能格的過去』テーゼを論証しようとした 30-40 年代の『能格論者』の試みの方が確かに優れていた」。

次に、2) 受動型（受動的能動化段階）についてである。これは現代の用語による活格型である。活格型類型の全体像が現れてくるのは1970年代に入ってクリモフ以後であるが、1930年代にメツシャニーノフは、受動段階には他動詞と自動詞の対立は欠如していることをアリュート語によって証明している。すなわち、受動段階では、行為の他動性、自動性は動詞の構成（動詞形の客体性、無客体性）如何に掛っているとして、*anğaḡi-h suku-h* 『人 *man*・取る-彼が *takes-he*』と *anğaḡi-m sukū* 『人 *man*・取る-彼は-彼を *takes-he-him*』(逐語的には、『人の・取ること-彼を *man's taking-him*』)を挙げ、「前者では動詞が無客体的に構成されているのに対して、後者では客体を付加して構成されている。…行為主は直接格になったり、相対格になったりする」²³。同じ古アジア諸語の分析で扱った同じ文例によって、「この二つの活用構造、すなわち直接（主体）格構造と相対（主体・客体）格構造は、我々の能動態と受動態という意味での対立ではない」という、態（voice）ではないディアテシス構造を明らかにしている。この状態はデスニツカヤが研究した印欧語古層に類似している。

3) 能格型、4) 能動型（ないしは能動論理型）すなわち主格型、についていえば、当時は全体像としてはともかく断片として浮かび上がって来た輪郭像であろう²⁴。

1940年代には、文発達の『能格段階』の普遍性を斥けて主格構造や能格構造がその何れの文構造にも先行するもっと早期の文構造から並行的に発達して来たとする構想が、始原的能格性説に対して益々決定的に対立し始めた、とデスニツカヤは書く。すでに活格類型の断片とはいえ最も核心的な断片である動詞の語彙化原理—他動性～自動性による対立ではなく行為動詞～状態動詞の対立—が明らかにされていた。メツシャニーノフの次の定式化も彼が活格構造の析出に如何に接近していたかの証明である：「つい最近、コーカサスの群小ヤペテ諸語の長期に亘る研究の結果、それらの中には、上に指摘した二つの文構造（能格的と絶対格的の文構造—クリモフ）の対立がはるかに広範に行われているものがあることが判明した。あり得る可能性は、非他動的な行為も含めて、行為の全てが、名詞述語は勿論、動詞述語の表す状態の表現全てに對置されることである。このことから、行為動詞が分離され、主語は、自動詞の下でも能動格に立つことができる。状態文における主語の絶対格は、名詞述語を状態動詞の動詞述語と益々接近させる。根底にあるのは、もはや客体の有無ではなく、行為の全てを状態に對置する文の意義である」²⁵。ま

²³ *Меца̀нинов И. И.* Новое учение о языке. Стадиальная типология, ОГИЗ, Госуд. Социально-экономическое из-во, Лен.отделение, 1936, p.333; クリモフ「新しい言語類型学—活格構造言語とは何か」,三省堂, 1999, p.20; クリモフ「ソ連邦における類型学研究」(名大科研報告), 2002, p.280

²⁴ *ejusdem.* p.71; クリモフ「新しい言語類型学—活格構造言語とは何か」,三省堂, 1999, p.21

²⁵ *Меца̀нинов И.И.* Глагол (「動詞」), Из-во АН СССР, 1949, p.86 (Наука, Лен.отд., 1982, p.100); クリモフ「新しい言語類型学—活格構造言語とは何か」,三省堂, p.21 (原著 p.27-28)

た、古アジア諸語の資料等によって、言語類型の組合せを変更し、抱合 (incorporation) を精査する中で単語文 (слово-предложение) を提起するなど、思考分野との関係よりも、語と文の発達 (それらの歴史的相関関係)、文の構成部分としての抱合的複合体、統語的複合体の研究へ²⁶、すなわち言語の内部構造自体の研究こそが段階性問題を解決への道だとする主張が前面に立つことになった。

デスニツカヤは、1947年にポテブニャの統語論学説を巡ってカツネリソンとヴィノグラードフ間に激論が交されたと書いているが、クリモフは自分の学史で、この間の事情について、「まさにこの時期、段階性批判を含んだいくつかの論文が現れた」(cf.「序論」註59にヴィノグラードフの論文名)、と書く²⁷。「この時期」とは、この「事件」の前年1946年には、デスニツカヤは博士論文「印欧諸語における直接補語範疇の発展」を発表し、印欧諸語の状態が活格構造の諸特徴を備えた状態であることを立証していた時期である(当時は同構造の名称はまだ与えられていなかった)。「この時期」についてデスニツカヤを補足すれば、メシチャニーノフは、デスニツカヤが挙げる「一般言語学 語と文の発達における段階性の問題によせて」(1940)以外に、「文の成分と品詞」(1945)と「動詞」(1948)を著している。ジルムンスキー (В.М.Жирмунский 1891-1971)によれば、これら二著は「ソ連邦内の非印欧諸語についての比較類型論への初めての試みであったが、この二研究を発表したこと自体が、彼の関心が各種類型諸言語の構造的諸要素間の徹底分析に向けて一定のシフトを行なったことを表している。…両研究は、形式類型学が用いる問題群への関心の一定の増大という特徴だけではなく、メシチャニーノフの先行構想にとって重要であるいくつかの命題を放棄している点でも特徴的である。とりわけ、抱合 (incorporation) が、1945年のモノグラフでは、もはや単語文段階を以前提起した主導的な類型特徴としてではなく、ただ単に文における語の統語的結合の形式的手法総体の一つにすぎないものとして特徴づけている」²⁸。「この時期」の論文「言語の発達における段階性の問題」(1947)において、段階とは言語の組織体系の部分でなく構造体全体のシフトのことであり、例えば北部カフカース諸語の能格構造と印欧諸語の主格構造の構文という断片の比較だけで当該問題を論ずべきでないと言明している：この問題の解決のためには、「各言語の歴史的断面での組織体系の資料の全面的な研究が求められるのであって、私は今とてもこの問題に対して遺漏なき答えを出すことはできない」、あるいは彼が当時

²⁶ Мещанинов И.И. Общее языкознание, К проблеме стадийности в развитии слова и предложени я (「一般言語学—語と文の発達における段階性の問題によせて」), Л., 1940; cf. 柳沢民雄「ロシア・ソヴィエト言語類型論とカフカース諸語」—『類型学研究』5号, 2019, p. 8-9

²⁷ クリモフ「ソ連邦における類型学研究 (20-40年代)」(名大科研, 2002), p. 303

²⁸ クリモフ「ソ連邦における類型学研究 (20-40年代)」(名大科研, 2002, p.301)

類型分類（無形型 *amorphous*—所有型—能格型—主格型）といった類型分類に「類型的な差異以上に段階的時代区分の構想まで見出すのはかなり時期尚早だ」、と述べている²⁹。序でながら、カツネリソンの「歴史的文法研究—限定的関係の歴史から」（博士論文 1939年）が公刊されたのも「この時期」であった（1947年）。尤もこの論文では「能格性の概念が事実上欠落している」（デスニツカヤ）。

ところで、カツネリソンの著作については、「カツネリソン 言語と思考のカテゴリー」（2001年）、「言語類型学と言語的思考」（2009年）、「一般言語学と類型学」（2009年）、「歴史的な文法研究」（2010年）のように、2000年代に入って主要著作の再版が続いている³⁰。特にこの最後の著作には最重要モノグラフである修士論文「主格文の起源によせて」と博士論文「歴史的な文法研究—I. 限定関係の歴史から」が合冊して収められている。前者は元々1936年イヤム「紀要（Труды）」（*Romano-Germanica* シリーズNo.1）刊、後者は1949年科学アカデミー出版所刊であった。2010年版は「ペテルブルク言語学協会」（サンクトペテルブルグ）刊で、この再版書に書かれた編者の「前書き」によると、前者は1935年2月論文審査時点では「ゲルマン諸語における補充法（*suppletion*）代名詞と主格文の起源」という表題であったらしく、彼は古代ゲルマン諸語の人称代名詞の補充法に能格的過去の痕跡を見たのである（I章）。さらに能格性に関与的な特徴として、非人称構文（II）、*-to-*、*-no-*接尾辞を付す態（*voice*）と分詞（III）の分析を試みたのであるが、結局それによって印欧諸語の過去に能格構文が存在したという自らの最初のテーゼを証明することはできなかったが、デスニツカヤは、「古代型の主格構造…に特徴的な文法的諸現象の意味的解釈を深化させかつ広げた」と評価している。ちなみに、再版書編者は後者について、博士論文審査時点（1939年6月）での論文題は「主格的な言語構造—第1部 限定関係と述語関係」という「まるで尋常でない」表題名であったが、論敵（*opponent*）の一人であったメツシャニーノフは皮肉を込めて、論文を二分して前半部で修士の学位を、後半部で博士の学位を得た今は亡きある教授の例があるが、君はその二例目の教授の道を行くのか、と述べた、というエピソードを語っている³¹。

²⁹ *Мещанинов И.И.* Проблема стадильности в развитии языка — *И.И.Мещанинов* Проблемы развития языка, Наука, Лен.отделение, Л., 1975, p.8, 294, 295 に所収；cf. クリモフ「ソ連邦における類型学研究（20-40年代）」（名大科研, 2002, p.302-304）

³⁰ *Кацнельсон С.Д.* «Категория языка и мышления — из научного наследия», Языки славянской культуры, М., 2001; *ejusdem* «Типология языка и речевое мышление», ЛИБРОКОМ(URSS), 2009; *ejusdem* «Общее и типологическое языкознание», ЛИБРОКОМ(URSS), 2009; *ejusdem* «Историко-грамматические исследования», Петербургское лингвистическое общество, Санкт-Петербург, 2010；カツネリソンは現ロシアでは再評価が進んでいると思われる。そのことは、この2010年刊の編者の「前書き」（*предисловие*）から窺がわれる。

³¹ カツネリソン「歴史的な文法研究」の2010年刊の編者「前書き」（*предисловие*）には、次のような趣旨の逸話が書かれている：メツシャニーノフはカツネリソンの博士論文審査の席上、「カツネリソンは、かような『全体の代りに部分』の審査の道を拓いた古いアカデミーの伝統に従っている」；「私は個人的にはこの

こうした状況の中で、イヤムでは1946年12月-1947年2月の期間中メッシャニーノフの発意で段階性問題の検討を目的とした学会議が開催された。討論の結果明らかになったことは、先行諸研究でしばしば混同されるいくつかの鍵となる概念とりわけ段階とか文の構造(структура [строй] предложения)の概念を分離・峻別すること、そして異なる経路を辿る類型的転換— a) 能格構造→主格構造、b) ある種のより古体的構造→能格構造あるいは主格構造への直接的な変換)—の可能性があること、であり、的確な類型的分類を構築していく上で最も重要な前提条件は言語資料自体の徹底研究だけだ、という点であった。メッシャニーノフは極めて慎重に結語報告を行なったという：段階性の理念を適用する場合、「報告者間に彼らが研究対象とする言語資料の具体的な差異に起因する部分的な食い違いがある。研究の現段階では、恐らくこうした矛盾は避け難いであろうし、段階の基本諸特徴に応じた言語諸段階の完璧な体系的記述を行うことはできまい。先ず問題なのは、個々の言語や言語グループの具体的な歴史的研究に現れる一連の段階的移行についてである。特に、印欧語系統の諸言語のさらに深い比較・文法的研究は、現代言語学をして前主格構造の問題に至らしめるのである。しかし、言語研究が照準を合わすべきは、先ずは当該言語の歴史の研究であり、次いで同グループ(同系統)諸言語の比較、そして最後に異なる系統の諸言語の段階・類型学的類似性における比較である。我々は、こうして様々な言語の資料に基づいて行われた、方法論的に正確かつ厳密に検討された比較・文法的な研究によって、最終的に段階概念を明確化し、段階的移行の構想図を画くことができるのである」³²。このように振り返って観ると、メッシャニーノフ期は「全体として肯定的な影響を及ぼし、…文法的諸範疇の発生と機能化の歴史的法則性の解明に狙いを定めて、言語構造の共時的研究と通時的研究の活発化を促した時期であった」(デスニツカヤ「序論」)。しかも、30-40年代にはマールの言語学説の具体的な命題や言語分析の方法(四要素による)は「実質的にはもはや誰も使わなくなっていた」(同「序論」註11)にもかかわらず、そして彼女による実況の学史に現れるメッシャニーノフ像からは想像もできない理由で、不幸にして、いわゆる50年論争が史的類型学研究を中断させることになっ

道を支持する者ではないが、ここにはそれなりに正当化できる独自面もある。どれもが極めて複雑なテーマ故論文の完成を期待するのは理に適うまい。それには長い時間と辛抱強い研究作業が必要となろう、と述べたという。これが著書として公刊されるのは、1939年のこの論文審査から10年後の1949年、正に50年論争の前夜であった。1949年刊のこの書に入らなかった「前書き」のゲラ刷りが残っており、カツネリソンはそこに、「第I部は思考の歴史との関連による文法構造の歴史に関する研究」であり、「別様には、言語資料に基づく思考の歴史に関する資料と題してもよい」と書いたという。「今にして思えば、これは彼が一生を掛けた仕事であった」と編者は語っている。一貫して冷静で慎重なメッシャニーノフ(1883年生)と若きカツネリソン(1907年生)のバトスが対照的であるように思われる。デスニツカヤ「序論」が書くように、40年代のイヤム学会に前後して、メッシャニーノフは「一段と柔軟な史的類型学研究の課題」を提起したのである。

³² クリモフ「ソ連邦における類型学研究(20-40年代)」(名大科研, 2002, p.303-304)

た。今にして思えば、デスニツカヤの博士論文「印欧諸語における直接補語範疇の発達」(1946年)のテーマも内容も含めてメッシャニーノフ期以後の類型論学派の諸説のテーマと、いわゆるスターリン論文(1950年)³³のそれは理論上直接的にかみ合う所はない。中断の理由は凡そ科学とは別の面にあったと考えざるを得ない。

長い断絶の後、ようやく1960年代になって史的類型学研究が復活する。1964年12月7-11日かけてジルムンスキー(В.М.Жирмунский 1891-1971)、カツネリソン等が組織委員となつて、ソ連科学アカデミー言語学研究所レニングラード支部との共同でソヴィエト言語学学術理論会議(公開拡大教授会)が開催された。その時の諸研究報告要綱(тезисы)が出版のため改稿(改訂)され再提出された報告論集が「各種類型諸言語における能格構文」(ЭКПЯРТ エクピャルト論集)(1967年)である³⁴。

同報告論集には能格構造に関連して、各種諸言語の能格構文、能格、前主格的構造、主体・客体関係の表現、他動詞、等のテーマの32論文が収められている。例えば、メッシャニーノフ「能格的文構造の基本的文法形」、チコバヴァ「イベリア・カフカース諸語における能格構文の問題」、カツネリソン「能格構文の起源によせて」、グフマン「人称の与/対格をもつ構文と印欧諸語の能格的過去の問題」、スニク『「非主格」的文構造に関する問題によせて』、クリモフ「ザン語における能格構文」、ゲツァゼ「アブハズ語における能格構文の形成の歴史によせて」、Мクマホフ「アディゲ語、カバルダ語、ウブィフ語における能格の問題によせて」、Zクマホヴァ「ウブィフ語における能格構文」、ヂャーコノフ「能格構文と主体・客体関係」、トロンスキー「印欧諸語の前主格的過去」、ピレイコ「イラン諸語における能格構文に関する問題によせて」、スコリク「チュクチ・カムチャッカ諸語における能格構文」、等々である。デスニツカヤが具体的に挙げたのは、印欧語の「能格的過去」について論じた印欧学者ヴァチェスラフ・イヴァノフ(Вячеслав Вс. Иванов 1929-2017)³⁵とサフチェンコ(А.Н.Савченко 1907-1988)の研究についてである。デスニツカヤによると、印欧語の「能格的過去」というテーマは、50年論争以前の類型学研究以来「二度目のテーマ再燃」だったが、この「二度目の再燃にとって特徴的だったのは、30-40年代の意味的研究方向性とは異なって、特に形態分野から論証を引き出

³³ 「マルクス主義と言語学の諸問題」(1950.6.20「ブラヴダ」紙)

³⁴ Эргативная конструкция предложения в языках различных типов (略称 ЭКПЯРТ), Л., Наука, Лен. Отд., 1967; cf. 柳沢民雄「ロシア・ソヴィエト言語類型論とカフカース諸語」-『類型学研究』5号, 2019, p. 16-17

³⁵ デスニツカヤが「序論」で引用したイヴァノフ論文「共通印欧語における能格構文」«Эргативная конструкция в общеиндоевропейском»はЭКПЯРТ要綱(Тезисы 1964年12月7-11日)からの引用であろうか、ЭКПЯРТ1967年の報告論集にはない。サフチェンコ論文「印欧祖語における能格的文構造」«Эргативная конструкция предложения в праиндоевропейском языке.»は、報告論集(ЭКПЯРТ1967年, p.74-90)に掲載されている。

す点であった。…決定的意義が付与されたのは、一つの論証—主格と属格の -s 指標の同一性の証明—であった」。すなわち印欧語の古層における主格と属格の語尾 (-s 指標) の一致から -s 主格形が能格構文の能動 (active) 格形 (「専用能格」の機能を有すること) に起源をもつという論法であった。サフチェンコも、印欧語の *-es 格は「行為動詞の下での主体、間接客体と場所—能格が特徴とする、諸意義の兼務」を表したから能格であった、という論法である。能格言語の能格には行為主体の意義 (専用能格) と斜格の意義が融合 (兼務能格) しているが、主格形と属格形が同一であることを根拠として能格的過去が存在したことを証明するという手法である。デスニツカヤは、サフチェンコのこの論法を、「能格の、間接客体の組織体系への帰属性を証明するに際して必須であるべき統語的アプローチという厳律を犯している」と批判している。ただし、サフチェンコは同論文で、「現代諸語に存在する能格構文の種類 (variants) と比べて見ると、この能格構文は通常のものではないことが判る。ここでは行為主体を能格で表すか絶対格で表すかは、行為主体の表現が動詞の他動性か自動性によるのではなく、行為の動詞形か状態の動詞形かに依るからである。ここでは、能格は行為主体や間接客体だけでなく、願望、知覚や思考の対象も表したのである。しかし、その特徴は、能格構文の分析が示しているように、その現代の能格構文諸型の特徴よりはさらに古風なのである。能格構文の現代の諸型は多分、それが発生した時点のものとははるかにかけ離れたものになってしまっている、と考えなければならない」、と述べる³⁶。事実上これは、活格の主語と不活格の補語をもつ活格構文のことであるが、メッシュャニーノフ期以後 50 年論争を経てなお 60 年代後半になっても研究者の多数派が活格型を初期能格型と捉えていたのである。名詞形態の在り方と動詞の語彙化原理という各断片が繋がっていないのである。この時点ではイヴァノフもサフチェンコもカツネリソンもグフマンも印欧語古層についての熱心な「能格的過去」説論者であったが、一方では、活格構造の諸特徴集合体 (包含事象) の諸断片は、彼らも含めて伝統的な能格性理論のプリズム越しに多くの研究者が捉えていたのである。そして、クリモフによる活格構造言語の再構以後、「反能格性論者と能格性論者間でなされたかつての喧々囂々たる苛烈な論争は事実上鎮静化してしまった」(デスニツカヤ) のであり、能格性説の熱心な同調者であったイヴァノフやグフマンやサフチェンコ等も活格構造構想を支持するに至り、その後印欧語活格説に則った印欧語個別の理論諸構想が発表するまでになったことは

³⁶ А.Н.Савченко. Эргативная конструкция предложения в праиндоевропейском языке. («印欧祖語における能格構文») – ЭКПЯРТ, p.90.

周知のところである³⁷。ただし、ガムクレリゼとイヴァノフの「印欧語と印欧人」には、印欧語動詞の形態的論証はあるが語彙化原理に特化した記述はない³⁸。

ところで、デスニツカヤは特に取り上げていないが、この「各種類型諸言語における能格構文」(エクピャルト論集)(1967年)にはメッシュャニーノフの3頁弱の短い巻頭論文「能格的文構造の基本的文法形」も掲載されている³⁹：「自動詞文の主語は主格構文の主格に相当する文法形をとるから、自動詞文そのものは主格文の構造化システムに組み込まれているなどという見解に与しない」；「能格構文は主格組織(主格システム)に対置される統語組織全体と私は見なすのであるが、そのことは他の諸研究で能格的文構造に対して与えられる定義と異なっている。他の諸研究で注意が集中されるのは文成分の文法形であり、文法形が文全体の構造の中で果す機能については明確にしない。…能格構文は、同構文において醸成されて来た統語組織(統語システム)全体として主格構文に対置される。個々の文法形は両方の文構造化組織(両システム)において一致することがあるが、文の主成分と両組織の文法的形式化は、能格構文では能格構文が定める意義をもつ」と述べる。このことは、彼の死後発見されたモノグラフ「各種諸言語における能格構文」(1967)においてさらに具体的に説明されている：「私は、こうした言語構造の理解(文類型を本質的に孤立した、全く相互無関係な文モデルの一定集合とする解釈について述べたもの)を断念し、『能格性』という名称を、主語の格から統語構文全体に広げることにした…。ディルが指摘した三つの構文(能格構文、絶対構文、情緒構文ークリモフ)の比較から、私は、カルトヴェリ諸語ではこれらは全て同一の構造図式だ、と考えるべき論拠を得る。…(また)アヴァール語の中の、五つの異なる構文タイプは全て⁴⁰、それらに共通の同じ構造組織図に適合するものであり、そのことこそ、当該統語構文の幅広い理解の根拠となったのである。ディルのように、能格主語をもつ文だけを当該統語構文に入れることは、あまりにも狭すぎるのであ

³⁷ 柳沢民雄「ロシア・ソヴィエト言語類型論とカフカース諸語」－「類型学研究」5号, 2019, p.15-16

³⁸ Г.В.Гамкрелидзе, Вяч.Вс.Иванов Индоевропейский язык и индоевропейцы, Реконструкция и историко-типологический анализ праязыка и протокультуры, Из-во Тбилисского университета, Тбилиси, 1984－能格性と主格性(対格性)は同一の深層的關係の二つの表層構造的關係であるから、能格構文から主格構文への移行(orその逆移行)に際しては本質的なものが変わる訳ではない；深層構造的変化は活格構造から能格構造あるいは能格構造へのシフトの場合である、と考えているようだ(同著314-315他)。デスニツカヤの指摘通り、エクピャルト以後の能格論の「二度目の再燃」における「形態分野からの論証を引き出す」特徴の現れか？

³⁹ Мецанинов И.И. Основные грамматические формы эргативного строя предложения – in ЭКПЯРТ, p.7-9－同論文は要綱(тезисы 1964)か？(ЭКПЯРТは1967年4-8月にかけて出版手続きが行われた。

⁴⁰ アヴァール語では、自動詞文の主語 vac 「兄弟」は絶対格、他動詞の主語 vacas は能格、感覚動詞の主語 vacase は与格、知覚動詞の主語 vacasda は所格、所有動詞の主語 vacasum は属格に措かれる構文を指定するが、これらは全て相互無関係な文モデルの集合ではなく、能格性原理という同一構造図式に則るもの、とする認識を述べたもの。

る」⁴¹。結局、メッシュャニーノフは、形態主義批判と部分を体系組織全体の中に位置づける重要性を強調したのであり、類型学が総体系類型学（whole system typology）であるべきことを主張したのである。

同趣旨についてはクリモフも指摘している：「圧倒的多数の先行諸研究の最も重要な特徴は、研究対象に対する視点が個別的な諸現象だけに限られる、あるいはまた、よくてもはるかにもっと大きな類型組織の中に機能する小さな断片だけに限られることである」⁴²。

とは言え、活格構造の断片的諸特徴（名詞や動詞の）を捉えながら、それが全体像に繋がらない状態に転機をもたらしたのは、やはり、印欧語、カフカース諸語、古アジア（旧アジア）諸語、現代イラン諸語、現代イラン諸語、等々の諸言語の専門家が一堂に会した、上記の64年末に開催された「各種類型諸言語における能格構文」（エクピャルト1967年）学会であろう。これは「統一図式に沿った構成ではないけれども、それにも拘らず類型学的比較にとってかなり密接に関連する（relevant）諸事実集合を提示したのであった。理論的諸問題に関して行われた討議も全体として、能格構文を独特の文構造化タイプとする理解を深化させる役目を果たした」（デスニツカヤ）。クリモフは、1964年エクピャルト学会で「ザン語の能格構文によせて」について報告したが、この集団的討議の場がクリモフにとっても能格性研究の大きな転機になったと思われる。クリモフは後に、「まだ能格性理論の問題を専門的にやっていた」⁴³と述懐しているからである。その後、彼が活格構造言語の全体的な類型の特徴について簡単な試論を発表したのは1972年の論文「活格構造諸言語特徴づけによせて」であったが、続いてその翌年1973年「能格性総論概説」でなされた能格性と活格性に関する結論と帰結は、さらに1977年「活格構造言語の類型学」で一層明確に定式化されたのである。50年論争で中断した能格性問題の諸研究をあらためて総括した64年学会ではなお能格的過去説が優勢であった状況が一変するのは、70年代に入っのクリモフの活動である。そのことをデスニツカヤはこの「序論」で次のように述べる：「印欧諸語の主格構造前史に関する諸問題の解決

⁴¹ И.И.Мещанинов. Эргативная конструкция в языках различных типов, стр.47-48, 49. —メッシュャニーノフは1967年1月16日に亡くなり、彼の死後、最終校正を終えないままのЭКПЯРТ（1967年）と類似した書名の著書「各種諸言語における能格構文」[248pp]《Эргативная конструкция в языках различных типов》, Наука, Ленноотделение, Л., 1967が出版された。こちらは1966年12月-1967年3月にかけて出版準備がなされた。

⁴² クリモフ「新しい言語類型学—活格構造言語とは何か」、三省堂, p.36

⁴³ ザン語は、南カフカースのメグルル語、ラズ語を含むグループ。この時点では、クリモフは能格構文のシンタグマについて、述語的シンタグマと補完的シンタグマ（客体的シンタグマ）の二つのシンタグマでなく、三つのシンタグマ（述語、主語、直接補語）を想定していたが、誤りであったと認めている—90-91 [2020年改定私家版拙訳 クリモフ「能格性総論概説」p.65]。Cf. シンタグマについては、山口巖「類型学序説」、京大学術出版会, p.69-70

に影響を与えた、文構造の史的類型学の研究における新しい段階を画したのは、クリモフの能格性理論の諸研究と、彼が『活格構造』«активный строй»(active structure, active system)と呼んだ、主体・述語関係および主体・客体関係の独自表現タイプに関する理論の諸研究であった」。

さて、クリモフは73年と77年の上記の二つのモノグラフであらためて、能格構文、能格的文構造（能格的文類型）、能格構造という三つのレベルの概念の峻別を提起したのである。すなわち、能格性は語彙、統語、形態、形態音素という言葉構造体を構成する各階層レベル全体に呼応諸特徴（包含事象 implication）として顕現するのであるから、これら諸階層全体を包括する概念としての能格構造（総体）という概念、能格性原理によって構文種（能格構文、絶対構文、情緒構文等）全体を統括する概念としての能格的文構造（能格的文類型）の概念、それら構文種の一としての能格構文、という三つの概念を峻別することに注意を向けさせている⁴⁴。ピヴォットとアラインメント、混合類型、分離（分裂）能格性、逆受身等の発想が内容類型学から出てこないのも、結局こうした前提が異なるからであろうと思われる。活格言語についても同じことであって、「活格構造は語彙、統語、形態レベルに発現する言語の統一的な呼応特徴組織である」から、「活格構文の概念、統一体としての活格的文類型の概念、そして最後に、活格言語構造総体」の概念の峻別は、活格性理論の正確性を保証するための必須条件だとしている⁴⁵。活格的文類型（活格的文構造）に属する構文種は活格構文、不活格構文、不随意行為・状態構文であって、これらは全て活性・不活性原理に規定される同一的統語構造図式に収まるものであることは言うまでもない。

クリモフについては、デスニツカヤの学史（「序論」）は上記の上の二つのモノグラフまでであるが、史的類型学研究に關係する特に次のモノグラフ—1980年 M.E.アレクセイェフとの共著「カフカース諸語の類型学」、1981年「ソ連邦における類型学研究（20-40年代）」、1983年「内容類型学の原理」—では、研究の進展に合わせていくつかの重要な修正あるいは具体化・精密化が行なわれている点に注意が必要である。詳細については、すでに「類型学研究」5号の拙論に書いたことなのでここでは省くが、最も重要な点についてだけ繰り返しておく：「非他動的行為の主体が他動詞の客体と同様に解釈されるのに対して、他動的行為の主体は何か別様に解釈されるような組織体系とする、多くの記述研究や理論研究に広く行き渡っている能格組織体系そのものの定義は正確さを欠くばか

⁴⁴ Климов Г.А. Очерк общей теории эргативности, Наука, 1973 [ЛИБРОКОМ, 2009], 1973, p.4, 57-60 (クリモフ「能格性総論概説」[2020年改定私家版拙訳「能格性総論概説」p.1-2, 42-44])

⁴⁵ クリモフ「新しい言語類型学—活格構造源とは何か」(原題「活格構造言語の類型学」), 三省堂, 1999, p.40-41 ;

りでなく（行為の他動性と自動性を援用している以上）、不完全である、と認定しなければならない。この定義は、ここに存在する、他動的行為の主体と間接客体の解釈の重なりを考慮していないからである。勿論、こうした不完全さは、すでに伝統的な内容類型学構想を出発点とする類型学者等の諸研究の中に見ると幾分意外に思われよう（特に本書の筆者も、過去において、能格的文類型の定義を定式化しようとして、この不完全さを免れることができなかつた）。まして、変形成分における様々な操作の基礎になる主体、客体、間接客体の概念に立脚することをその方法論的特徴とする関係文法の軌道上で活動する研究者等の諸刊行書の中でこのような不完全さを見ると、なおさら意外に思われる⁴⁶。もう一つの重要な精密化は、能格言語に機能する動詞の呼称として、他動詞と自動詞という用語法の修正である⁴⁷。

最後に、デスニツカヤ自身の研究の意義についてである。彼女の「序論」の最終節で、自身の印欧語古層研究の目標と概要について次のように説明している：「直接補語の文法形式としての印欧語対格は、動詞における他動性－非他動性範疇やヴォイス（態）範疇も包摂する明確な文法範疇組織の連環を構成する要素の一つである。それ故、直接補語範疇の生成過程や形成過程の問題を研究する際に注意を向けるべきはこの諸現象の集合全体であり、特に動詞の他動性範疇の歴史的 성격に関する問題を解決すべきであつて、印欧諸語にとってこの他動性範疇抜きには動詞述語に付く直接補語は考えられない⁴⁸。そこで、ホメーロスの「イーリアス」の「対格の使用ケースを隙間なく連続的に抜粋した資料に基づいて対格の古代的意義範囲を研究」する中で、他動性－非他動性範疇の歴史性、すなわち同範疇が相対的に後発的であることを証明したことが重要である⁴⁹。彼女自身が「序

⁴⁶ クリモフ「内容類型学の原理」、三省堂、2016、p.140-144；cf. 拙論「人類史における活格言語、能格言語－内容類型学の視点から」（『類型学研究』5号、2019）；「G.A.クリモフ著『内容類型学の原理』についての覚書」（『類型学研究』2号、2008、p.53-54他）。ちなみに、クリモフは「能格性総論概説」（1973）では、次のように定義していた：「深層的・統語的レヴェルにおいて能格的文類型とみなすべきものは、他動的行為の主体が、非他動的行為の主体とは別様に解され、他動的行為の客体が非他動的行為の主体と同様に解されるような類型である（当然、ここで用いられる深層的主体と客体の概念は、外部から与えられたものであり、それを如何なる文成分によって表すか、ということとは全く無関係であることを前提としている）。このことから、能格構文とは能格類型の他動詞文モデルであり、絶対構文とは能格類型の自動詞文モデルである、ということになる」（*Климов Г.А. Очерк общей теории эргативности*, Наука, 1973 [LIBROKOM, 2009], 1973, p.48 [2020年改定私家版拙訳「能格性総論概説」p.34]）。

⁴⁷ 「類型学研究」5号、拙論「人類史における…」p.111-112；クリモフ「内容類型学の原理」、三省堂、p.118-127、他。

⁴⁸ 山口巖先生の英文論文“Concerning Diathesis of the I.E.Active Past”-「ことばの構造とことばの論理」、1998、p.511に引用される。同論文には特にデスニツカヤ論文の引用が多い。

⁴⁹ その具体例については、山口巖「類型学序説」、1995、p.242-245、251；idem. “Concerning Diathesis of the I.E.Active Past”-「ことばの構造とことばの論理」、1998、p.505-515；cf. なお、拙論「対格、補語、他動性－印欧語史からロシア語史へ」（『大阪外国語大学論集』31号、2005、p.91-95）および拙著「ロシア語の歴史－歴史統語論」、グイターソリクション、2007、p.296-301のホメーロスの諸例は、本稿に紹介したデスニツカヤ著「比較言語学と諸言語の歴史」第I部の論文からの引用。

論」に書いたこの対格、補語、他動性の研究の概要については、彼女自身の「序論」の記述に譲ることにして、クリモフの対デスニツカヤ評を挙げておく：「この点でこれに劣らず注目に値するのは、デスニツカヤの博士論文『印欧諸語における直接補語範疇の発展』（レニングラード、1946）である。この研究で追跡されている、最古の印欧祖語の状態の諸特徴、例えば、『有生』類名詞と『無生』類名詞の二項対立、他動性～自動性という動詞特徴の構造的非関与性（と、これに関連した、直接補語と間接補語への補語弁別の欠如）、動詞における能動と中動というディアテシスの区別、対格が未完成であってそれはある種の状況・限定的意味をもつ格の機能化段階を経て形成されたものであること、等、のような特徴は、事実上、印欧祖語の類型が、能格類型ではなく活格類型として認定されることを裏付けるものであった。このことは、能格構造が世界の諸言語にとって普遍的意義を持った言語原生段階だとするわが国の言語学に広がっていたテーゼは、論拠不在だというさらに大きな結論を導いたのである」⁵⁰。デスニツカヤの博士論文「印欧諸語における直接補語範疇の発展」（1946）の全体構想の約2分の1を収めた「比較言語学と諸言語の歴史」（ナウカ・レニングラード支部1984）の公刊は、クリモフによる能格性と活格性の理論構想が公認され、能格性説の熱心な同調者たるイヴァノフやグフマンやサフチェンコ等々もクリモフ構想に与する環境が整うまで待たなければならなかったことになる：「…主格構造の起源問題とりわけ印欧諸語における直接補語範疇の起源また他動性・非他動性範疇の起源の問題に取り組んだ私の初期諸研究で当時展開した構想が支持されていることについて喜びを禁じ得ない。この構想は…活格構造理論に完全に収まる」と彼女は吐露している。この出版にはカツネリソンも審査委員（рецензент）として関わった。クリモフやカツネリソンの諸研究とともにともにデスニツカヤの同著は再版されて然るべき著書である。クリモフが先導した内容類型学構想の集大成に印欧語学の側から最も直接的に寄与したのは彼女であつたらうと思われるからである。

本稿の結びとして、何故活格構造の断片的諸特徴（名詞や動詞の）を捉えながら、それが活格言語類型の全体像に繋がらず、また活格言語類型と能格言語類型の峻別不能の状態が続いたのか？この要因の一つとして考えられるのは、用語装置の不統一性である。それは事態を主格言語構造のプリズム越しに眺める習性からの脱却を難しくするからである。デスニツカヤはこの「序論」の中で、彼女自身は印欧語古層の活格性状態に到達しながら何の名称も与えなかったが、クリモフは先達の研究者達が急接近していた古層の漠然とした輪郭像の諸断片間の連関性を見出し、その諸断片をすなわち「言語諸特徴を巧みに統合して、自己の活格構造構想の枠内に歴史的に位置づけた（「活格構造」という用語自体が

⁵⁰ 拙訳「ソ連邦における類型学研究（20-40年代）」（名大科研報告、2002）, p.303

どの程度適訳であるかは別にして。ただし、この用語自体はすでに確立済みである」と述懐している。

アクティヴという語を聞くと直ちにヴォイス範疇の用語としてのパッシヴを連想する言語学関係者は多数にのぼると思われるが、そのため例えばトルベツコイ他のような錚々たる言語学者群もかつて能格構文「受動性説」を唱えたり、印欧語古層に能動類と受動類したがって能動格と受動格の区別を見つけたユレンベックがおり、能格構文の包含事象としての能動格と受動格を使ってきたソヴィエト言語学他があり、せつかく行為動詞と状態動詞を見つけていたにもかかわらず、その行為動詞が構造化する構文を能格構文と呼称する能格論や印欧語学もつい最近まであるいはひょっとして今でも普及しているのかもしれない。ただし、行為主体格として機能するいわゆる「専用能格」に「能動格」という用語法を用いて、本来斜格である能格一般＝「兼務能格」と区別したメッシュャニーノフの試みは、一定の有効性をもったことは勿論である。何れにせよ、上のような用語法の不統一性は、活格構造総体の諸断片が相互に連係し合う包含事象として捉えられなかった状況の反映である⁵¹。このことは、わが国において今なお一般的な傾向として、活格構造言語の記述において、木に竹を接ぐように名詞組織の活格・不活格に動詞組織の他動詞と自動詞を接ぎ合わせるような用語法を続ける限り、全体像の誤認に直結するだけだと思われる。このことは能格言語に他動詞と自動詞を接ぎ合わせる場合も同じである。

クリモフが析出した *aktivnyj jazyk* (active language), *aktivnyj tip* (active type), *aktivnyj padež* (active case), *aktivnyj stroj* (active structure) 等々のメタ言語にどう訳語を当てるかという問題は、同構造タイプの言語の理解の要に関する重要問題であった。わが国の一部では当時これらに動格言語、動格型、動格的等のタームが使われていたが、これらのタームにはその構造の論理に起因する各レベル(語彙、統語、形態、形態音素)の連係的な包含事象(implication)の束から成る統一的(全一的 *cerostnyj* [integrated])な構造総体としての活格(類)型言語の全体像を表象する言語力が具わっているかという点で難があった、と思われる。その点で、内容類型学にとって最も重要なキーワードとなる、活格言語、活格(類)型、活格構造、活格性、活格/不活格構文、活格/不活格、活性的/不活性的、等々の訳語は、活格構造総体(全体像)を捉える上で秀逸の用語法である、と考えるのである。山口巖先生によるこれらの訳語タームは欧米話者者と違って我々日本語話者には、アクティヴという語に常につきまとう多面・多義的な表象から逃れられる利点がある上に、これによって能格構造の用語法との峻別が極めて容易になるからである。活格言語の包含事象(*implikacija*)と随件事象(*frekventalia*)という訳語も山口巖先生によるものである。言語の弁証法的な発展過程の中では、当該類型が包含

⁵¹ クリモフ「新しい言語類型学—活格構造言語とは何か」,三省堂, p.38-41

(implicate)する事象は決して不動ではなく、やがては次段階の新しい包含事象が多発的に発現して来て先行段階の古い包含事象に取って替る—この先行期の残滓たる古い包含事象あるいは次段階に先駆ける萌芽してくる新しい包含事象に随伴事象 (frequently) という訳語を当てられたのも、山口先生の訳語の卓越性を象徴している。思考の変動に伴って発現する言語構造における内容と形式の矛盾(ズレ)が包含事象と随伴事象のズレとして現象化して行くダイナミズムを単に「多発」や「頻発」でなく「随伴」とされたところにも山口先生の深い戦略的意図が見て取れる。こうした訳語全てが我が国の言語学界でもすでにしっかりと定着していること自体が、当該タームの卓越性を証明している。